
LOVE SONG ~ 君に逢いたい ~

AYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE SONG ～君に逢いたい～

【Nコード】

N7425X

【作者名】

AYU

【あらすじ】

インディーズバンドでヴォーカルをしている大地には、大切にしている少女がいた。大病院で出会ったみのは心臓に病を持つという。家族の愛に恵まれないみのは、「家族になろう。そのあと恋人になって」と言う彼女の願いを大地は受け止める。一緒に曲を作ったり、ギターを教えたり、静かに愛を育んでいく大地とみのは。だが、みのはに忍び寄る病魔と周りの圧力でふたりは引き裂かれてしまう。

音楽を通して出会ったふたりの、切ない純愛ストーリー。

本家小説サイトで拍手御礼として連載していた『大地のラブソン
グ』を加筆修正しています。

【1】pure soul

「おつかれー！」

ライブの後の楽屋。バンドのメンバーは皆ビールで乾杯している。インディーズで活動しているこのバンドに、メジャーデビューの話が持ち上がった。

そのせいか、今日のライブは満員御礼。メンバーも客も妙にテンションが高かった。

体温と興奮状態はステージが終わってもまだ冷めず、小さな楽屋の中は熱気に包まれている。

皆が浮かれ騒いでビールを飲んでいるなか、大地は楽屋の片隅のパイプ椅子に座り、ひとりでコーラを飲んでいた。

「なんだよ大地。お前もビール飲め！今日はお祝いだぞ！」

「いや、俺は今日バイクだから……」

ドラムのアツシが「いーじゃん、いーじゃん！」と言ってビールをぐいぐいと勧める。

(やめろよ！このヨッパライ！)

アツシはライブ前からビールを飲んでいて、ライブ中もテンションMAXだった。

よくいえばムードメーカーなのだが、絡み癖があつて困る。

「やめとけアツシ。大地はまだ未成年だから、飲酒で捕まったらヤバイ」

そう言っすけて絡むアツシを止めたのは、バンドのリーダーの松木祐輔まつきゆうすけ

まだ大学生なのだが、妙に貫禄があるベ이스トだ。

「はああ。こいつまだ18なんだよな。酒もやらない、タバコも吸わない。まさか女もまだなんて言わないだろうな？」

アツシが冗談半分に言った言葉に、大地は真っ赤になって横を向く。

「うわっ、マジかよ。ステージの上では女をメロメロにさせてる大地くんが、こんな純情ボーイだとは誰も思わないぜ？」

呆れ顔で大地の額をアツシが小突いた。

みねやしきだいち 峰屋敷大地はバンドの中では最年少で、このあいだ高校を出たばかりの18歳だ。

在学中に松木の誘いでバンドに加入したのだが、その天才的な歌唱力とギターテクで、彼がメンバーになった直後バンドの人気は爆発した。

まだあどけなさの残るベビーフェイス。だが、そのパワフルな歌声は誰をも魅了する。

その一方、歌っているとき以外はあまりしゃべらず、MCの時間に一生懸命カミカミで話す姿に、女性ファンは母性本能をくすぐられるらしかった。

「いいだろ。大地のそんな純情さがいって女たちが、毎回詰めかけんだから」

「だな。俺たちのファンはヤローどもばっかだけだな」

アツシは笑いながら、他のメンバーのところへ絡みに行った。

周りに誰もいなくなったのを見計らって、松木がこっそりと大地に耳打ちする。

「大地、お嬢が来てるぞ」

「え!?!」

目を見開いて、大地はパイプ椅子から勢いよく立ちあがった。

「俺の車の中で待っててもらってるから……ホレ、鍵」

そう言って、セカンドバッグの中から取り出した車のキーを手渡す。

「サンキューー!松っちゃん!」

誰にも見られないように、大地はこっそりと受け取ったキーをポケットにしまい込んだ。

「あとは俺がうまくやるから……くれぐれも、気をつけるよ?」
「了解」

差し出された松木のゲンコツに拳を当ててニコリと笑うと、大地は足早に騒々しい楽屋を抜け出した。

ライブが終わってからだいぶ時間もたっていたので、出待ちをしていたファン姿ももう見えない。

大地はライブハウスから少し離れた駐車場に停めてある、場違いな高級車に向かって歩いた。

ガラスにスモークが貼ってあるから中は見えないが、きっとあの人が待っていてくれるはず。

大地はリモコンでピピッと車のロックを外した。

「大ちゃん！」

その途端、子犬のように元気よく車から飛び出してきた女の子。

「みのりちゃん！」

飛び跳ねるように抱きついてきたお人形のような女の子を、大地はふんわりと抱きしめる。

「大ちゃん、今日もかっこよかったよっ！」

興奮して目を輝かせ、みのりは大地のほっぺたにキスをした。

「みのりちゃんも、会場で目立ってたよ？なんだっけその服……ピク……？」

「ピンクハウス？」

みのりが、ゴージャスなフリルのついたそのスカートを片手でつまみあげる。

今日のみのは、大きなフリフリの襟で、袖がポンッと膨らんだお姫様みたいなワンピースを着ていた。

ところが大地のやっている音楽は洋楽かぶれのハードロック。大地自身も金髪に近い茶髪で、腕にはトゲのついたリストバンドをしている。

メンバーはもちろん、ライブハウスに来る客もそんな感じなので、白いぴらぴらの服を着たみのりは相当会場で浮いていた。

(すごく彼女に似合ってたかわいいんだけど……かなり目立ってたな)

おとぎの世界から抜け出てきたような女の子がライブハウスで元気に飛び跳ねていた姿を思い出し、大地は苦笑する。

「今日、俺バイクなんだけど……その恰好じゃ無理だよなあ」

すると、みのりがニコツと笑って大地に言った。

「着替えちゃんと持って来たよ？ちょっと待ってて！」

車にボタンと乗り込んだ彼女を待つこと5分。

ドアを開けて出てきたみのりは、ジーンズにパーカー姿で、お姫様からフツの女の子に変身していた。

「かわいいじゃん！」

「でしょー！いとこの果南ちゃんにもらったんだあ」

いつもお嬢様スタイルなので、こういうラフな格好がとても新鮮に映る。

「仕上げに、これを着て？ちょっと汗臭いかもしれないけど……」

そう言っただちは、着ていた皮ジャンを脱いでみのりに手渡した。みのりは一瞬首をかしげて考えるようなしぐさをしたあと、くんと匂いを嗅ぐ。

「ほんとに確かめなくていいからっ！」

「うめーん」

ニコツと笑って皮ジャンを着るみのり。どうやら合格だったらしい。

「うふふ。あつたかい」

ブカブカの皮ジャンを着て嬉しそうにする彼女に、用意していたヘルメットをかぶせる。

首のベルトを締めてあげ、そのまま抱き上げてバイクの後ろに座らせた。

「大ちゃん、私バイク初めて！」

「そうなんだ。病みつきになるよ？」

キーを回し、エンジンをスタートさせる。

アルバイトでようやく買ったアメリカンスタイルの250ccのバイク。

低いエンジン音と振動が心地よい。

ハンドルに手をかけた大地の体に、後ろからみのりがギョツと抱きついた。

「夜のツーリングに、レッツゴー」

みのりの言葉を合図に、夜の街に向かって大地はバイクを走らせた。

【2】出会い

「きゃーきゃー！大ちゃん、すごい風っ！」

「えー！？なに、聞こえないー！」

大地の背中にぴったりと体を押し付け、みのりがなにやら叫んでいる。

いつもはガンガン飛ばすのだが、今日は大事な人を乗せているから無理はしない。

車通りの少ない道を選び、大地は山の上までバイクを走らせた。

小高い山の頂上付近にある展望台。けっこう有名なデートスポットだ。

その駐車場にバイクを止め、みのりを抱き上げて下に降ろす。

「なんだか、体がまだぶるぶるしてる〜」

バイクの振動が体に残っているらしい。みのりが大地に見せた手のひらは、微かに震えていた。

「怖くなかった？」

「ぜーんぜんっ！だって、大ちゃんが一緒にいてくれるんだもん」

みのりは背の高い大地を見上げ、ニコツと笑いかけた。

大地もつられて、彼女に微笑みかける。

展望台の上は風が強かったが、ふたり寄り添って、きらびやかな夜景を眺めた。

大地とみのりが出会ったのは、大学病院の院内学級だった。

バンドのリーダーの松木は、そのいかつい容姿に似合わず大学でボランティアサークルに入っていた。

病院で働いている知り合いから、子供たちに音楽を教えてほしいと言われた松木は、一緒にやってくれと大地に頼んだのだ。

正直めんどろだなと思ったのだが、松木に世話になっていた大地は、一肌脱ぐことにした。

初めて院内学級に顔を出した時、そこにみのりがいた。

色が白くて、真っ黒いツヤツヤした髪の毛、天使のような女の子。はつきりいって、一目ぼれだった。

「今日はこちらにいるお兄さんとお姉さんが、みんなに歌を教えてくださいますよ」

若くて元気のいい女の先生が、そう言って3人を子供たちに紹介した。

花沢果南はなざわかなんというその彼女が、どうやら松木の知り合いらしい。

(へー。松っちゃんも隅に置けないじゃん)

松木が彼女を愛おしげに見る視線が、果南がただの友達ではないことを物語っていた。

授業が始まり、松木がギターを、みのりがキーボードを弾き、大地が歌う。誰も知っているような童謡とかアニメソングばかりだったので、子供たちも大喜びだ。最後には大合唱。あまり子供に接したことのなかった大地だが、その日は心から楽しく過ごせた。

「また一緒にやろう」と約束して別れたのに、彼女はそれから来なくなつて。果南にみのりのことを聞くと、「あの子はボランティアじゃなくてこの病院に入院してる子なの。ときどきあぁやって手伝ってくれるのよ」と教えてくれた。

みのりの病室を教えてもらい、大地は入院病棟に行ってみることにした。詳しいことはよく分からないが、彼女が入院している循環器科というのは、心臓の治療をするところらしい。

(悪い病気なのかな……)

あまり病気には縁のない生活をしていたので、病院独特の空気に違和感を感じて仕方がない。肩身の狭い思いをしながらエレベーターで12階までたどり着き、大地はおそろおそろ循環器科のナースステーションで看護師に声をかけた。

「あの……花沢みのりさんの病室ってどこですか？」

年輩の看護師は、大地を頭のとっぺんからつま先までジロリと眺めたあと、「ご家族の方以外、面会はできません」と大地の言葉を一蹴した。

(ま、そのうちまた会えるさ)

がっかりしつつ、諦めて帰ろうとしたその時、

「あー！大地くんっ！」

と、廊下の向こうから大声で名前を呼び、走ってくる少女がいた。このあいだのワンピース姿とは違って病院のパジャマを着ていたが、それは大地が一目ぼれしたみのりその人だった。

「花沢さんっ！廊下を走ってはいけません！それと大声も出さないっ！！」

さっきの感じの悪い看護師に怒られて、みのりは「ごめんなさい」とぺろりと舌を出す。

「私に会いに来たんだよね？大地くん。食堂に行こっ」

大地の腕をガシツとつかみ、ぐいぐいと引っ張っていく彼女は、とても病気で入院しているとは思えないほどパワフルだった。

病棟の食堂は談話室も兼ねていて、入院用のパジャマを着た患者と家族らしき人がたくさん座っている。

大地とみのりは、外の景色が見えるカウンターにふたり並んで座っ

た。

「びつくりしちゃったよ。いきなり病棟に大地くんがいるんだもん」

みのりは、黒目がちの大きな瞳で大地を見上げる。

(うっ。やっぱり超カワイイ)

大地をまっすぐ見つめるその瞳に、大地の胸はドキドキしていた。

「果南さんにみのりちゃんがここに入院してるって聞いて……どっか悪いの？」

「うん。赤ちゃんるとき心臓の手術をしてから、ときどき検査入院してるんだあ。最近ちょっと不整脈がひどくって」

「ふせいみやく？」

聞きなれない単語に、思わず聞き返す。

「んとね、私の心臓、いきなり早くなったり遅くなったり、時々止まったりするの。あんまり生活には影響ないんだけど、念のため異常を調べてて」

みのりは、なんでもないように自分の病状を言ったのけた。

確かに、重大な心臓の欠陥があったら、あんなふうに廊下を走ってきたりはしないだろう。

「そっかあ。大変だね。だから家族以外面会できないことになって

るんだ」

「そういうわけじゃないんだけどね。だって親もほとんど来ないよ？私是要らない子なんだもん」

「え？どういうこと？」

ケロツとした顔でびっくりするようなことを言う彼女。大地の問いかけに、みのりは窓の外を眺めながら事情を話してくれた。

「私ね、心臓の形が人と少し違うんだって。一応赤ちゃんのとくに手術したけど、完全ではないの。そしたらね、おじいちゃんが『こんな欠陥品、どこにも嫁に出せない』って私のお母さんをものすごく責めたんだって。だからお母さんは、私がまだ小さい頃、花沢の家を出て行っちゃった。お父さんとお兄ちゃんは仕事で忙しくて全然来てくれないしさ。唯一面会に来てくれる人なんて、いとこの果南ちゃんくらいだよ」

「へー。花南先生、みのりちゃんのいとこだったんだ。そういえば、くりくりした目もなんかはよく似てる」

彼女の話に対して大地が言ったコメントがおかしかったのか、みのりがクスクスと笑った。

「……俺もさ、親がいないんだよね。ずっと北海道で暮らしてたんだけど、両親が事故でいっぺんに死んじゃってさ。このあいだ一緒にセツシヨンした松木さんっていたでしょ？あの人んとこで今世話になってる」

自分の身の上なんて人に話したことはなかったのだが、みのりに

はなぜか自然に言えた。
みのりが複雑な家庭事情をなんでもないことのように話すから、自分もすんなり話せたのだと思う。

「じゃあさ、じゃあさっ！」

目を輝かせながら、みのりが大地の腕を掴む。

「私たち、家族になろうよっ！で、そのうち恋人同士になっちゃわない？」

「ええっ！？みのりちゃん、家族と恋人じゃ別次元じゃんっ！しかも順番逆じゃん、フッー」

そう言うってから、みのりの言葉の意味を考える。

今……恋人同士って言った……？

「え、ええええ　　！？」

大地は慌てて立ち上がった。

慌てすぎて派手に椅子を倒し、周りの注目を浴びてしまう。

「やだー！大地くんおもしろいっ！」

ケラケラと無邪気に笑うみのり。食堂にいた他の人たちも、皆クスと笑っている。

大地は真っ赤になりながら倒れた椅子をなおし、再びみのりの隣に腰かけた。

「私、本気だよ？大地くんカッコイイし、こんなきつかけでもないと私一生彼氏とかできなさそうなんだもん」

みのりが『お願い』のポーズをする。

(やばい……超カワイイ……)

目の前にいるみのりの姿を改めて見る。黒目がちの、ぱつちりした二重の大きな瞳。肌は陶器のように白くてすべすべしている。髪は一度も染めたことなどないのだろう。背中まである、サラサラの艶やかな黒髪。

こんな女の子、自分だって滅多に出会えないし、彼女にできたら超自慢だ。

「うん……わかった。じゃ、まずは家族からスタート？」

大地はニヤケそうになる顔を必死で押さえながら、努めてクールにそう言った。

「そ。よろしくね！大ちゃんっ」

満面の笑みで、大地の腕にしがみつくみのり。

こうして、大地とみのりの家族ゴッコがスタートしたのだ。

【3】ファーストキス

夜景を眺めながら他愛もない話をしてしていると、時間があつという間に過ぎていく。

ライブが終わったあとに出てきたから、16歳のみのりを連れまわすには遅すぎる時間だ。

「みのりちゃん、そろそろ帰らないと」

「えー！？もう少し大ちゃんとかうしていたい」

「ダメ。果南さんにも迷惑かけちゃうだろ？」

「……はい」

みのりは大地にそう諭さとされ、しづしづと展望台の手すりから離れた。

大地が差し伸べた手を握り、名残惜しそうにゆっくりと歩く。

体があまり丈夫でないみのりは、こうやって出歩くことも滅多にできない。大地にもそれは分かっていたが、なによりも心配なのは、みのりの体のことだった。

「ほら、もう手がこんなに冷えてるじゃん」

階段を下りたところで立ち止まり、みのりの両手を手のひらで包んだ。そして、はあっと温かい息を吹き込む。

その仕草を、みのりは黙って見つめていた。

みのりに『家族になろう』と言われてから約半年。

検査入院の結果、特に大きな問題はなく、彼女は退院して普通の生活に戻っている。

大地はバイトをしながらバンドの練習に励み、時間を見つけて彼女と会っていた。

みのりと会う場所は、公園だったりバイト先の近くのファーストフードだったり、とにかくのんびりした付き合いだった。

お互いに異性と付き合うのは初めてで、正直どんなことをしているかわからない。おまけに、彼氏彼女ではなく、家族としての付き合いだ。一体何をすればいいんだ？

だからたいていはみのりが行き先を決め、大地はそれに付き合い合っていた。

話すことも他愛のないことばかりだったが、それでもみのりは楽しそうにしていた。

彼女はライブハウスにもよく顔を出した。

心臓が悪いというのにあんな大音量の場所なんかに来て大丈夫だろうかと思っただけ、案外平気みたいだ。

「私、学校の体育の授業だって普通に出てるんだよ？そりゃあ、他の人より足は遅いけど」

「それって、みのりちゃんのお尻が重いからじゃない？」

「やだあ！大ちゃんのエッチー！」

ポカポカと殴るふりをするみのりの拳を、大地は笑いながら受け止める。

(そっぴや、学校に迎えに行ったときは大変だったな)

彼女の通う高校は、ミッション系の私立の女子高。

「校門の前で待っていてね」とみのりに言われていたので、大地はバイクを正門の脇に止め、みのりを待った。

ところが、いつまでたってもみのりは出てこない。

正門から次々と下校していく女子生徒は、大地の姿を見てキヤアツと真っ赤になったり、クスクス笑ったりする。

自分がさらしものになっているような気がして、大地はものすごく居心地が悪かった。

結局みのりが出てきたのは、大部分の生徒が下校してからだ。

「遅いよみのりちゃん！めっちゃめっちゃ恥ずかしかったんだぜ？」

そう言っつて少し不機嫌になる大地を、みのりが「まあまあ」となだめる。

「憧れてたんだよね、こういうシチュエーション。めっちゃめっちゃカッコイイ人が校門で待ってくれてさ、他の生徒たちが『誰を待ってるんだろっ』って興味しんしんで見てるわけ。で、私が校門から出ていくと、『みのり、待っていたよ』ってその人が抱きしめてくれてさー」

「みのりちゃん、それってマンガの読みすぎ」

呆れてそう言う大地に向かって、みのりはペロツと舌を出した。

そんな感じで、みのりとはゆっくりと心を通わせていた。

ままごとのような付き合いだったが、彼女が望むのは『家族』としてのぬくもりだ。

正直、焦る気持ちもないわけではない。ただ、こづいっく空気のように安心できる関係も、それはそれでいいと思う。

まるで兄が妹にするように、冷えた手を温める。

するとみのりは、大地の目をじっと見つめ、口を開いた。

「あのさー、大ちゃん。そろそろ私たち、恋人同士に昇格しない？」

「……なんで急に？」

内心ドキドキしつつも、冷静さを装ってそう答える。

「だってさー、ライブ会場で、大ちゃんモテモテなんだもん」

少し拗ねたように、目を伏せる。

今日のライブで、なにかあったのだろうか。

『お前のファンがみのりちゃんに悪さしないように、気をつける』

松木に何度も言われた言葉。

確かに、ファンの中には狂信的な奴らもいて、メンバーの彼女が嫌な目にあっただけでも一度や二度ではない。

大丈夫だろうと思いつつ、何かあったら『大地の妹だ』と答えるようにと、みのりには言い含めていた。

何度も何度も『アンタ、大地の何！？』と言われ、『妹です』と答えているうちに、みのりはファンの間でも『大地の妹』として定着したようだった。

「なんかさー、みんな私のこと『大地の妹だから』ってノーマークで、ちよっと悔しくってさー。今日も、『お兄ちゃん、デビューできたらいいね』って子供扱いなんだよー？」

そう言って、ぷーっとむくれるみのり。

なんだ、そういうことだったのか。

「家族より、恋人の方がよくなっちゃったの？」

クスクスと笑いながらそう聞くと、みのりがコクンと頷いた。

「……じゃ、今日から恋人同士ってことで」

大地はみのりの髪を優しく撫でた。

澄んだ瞳で見上げる彼女が、ふと目を閉じる。

(……正直、俺はずっと恋人のつもりだったよ)

大地はゆっくりと身をかがめ、彼女のさくらんぼのような唇にそっと自分の唇を重ねる。

初めてのキスをするふたりを、満天の星空が包みこんでいた。

みのりの小さな体を抱きしめていると、ふいに携帯電話が鳴った。

『おい。いつまで遊んでるんだ？早く帰ってこい』

松木からの電話だった。

みのりは果南と食事に出かけると言って出てきたらしいので、そろ

そろ送らないとまずい。

「……帰ろうか」

「ん」

恋人になった最初の日。まだまだ兄と妹のような空気感は否めない。でも、少しずつ恋人らしくなっていけたらいいと思う。

バイクでもとの駐車場まで戻ると、そこには松木と一緒に果南が待っていた。

「みのりちゃん、楽しかった？」

「うん！」

「なんかいいことでもあったの？顔がニヤけてる」

「えへへー、ナイスヨ」

いとこ同士の果南とみのりは、それこそ姉妹のように見える。いや、みのりを支える果南は、彼女の姉そのものだった。

「果南さん、遅くなってすみません」

「いいのよ。たまには羽を伸ばさなきゃ。私が一緒だと言っておけば大丈夫だから」

みのりの実家は、不動産業から始まって大企業まで成長した、日本でも屈指のグループ会社を経営しているらしい。

一度松木とともにみのりの家を見に行ったことがあった。ぐるりと敷地を取り囲んだ高い塀。入口には監視カメラも設置されていて、ものすごい威圧感のある家だった。

(お父さんとお兄さんは、仕事で忙しいって言ってたけど……)

あの大きな屋敷で、みのりはずっと寂しい思いをしてきたのだろう。だから大地に、家族の絆を求めたのだ。

(俺が、君を守ってあげるから)

大地は、そんな気持ちを抱きながら、遠ざかるテールランプを見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7425x/>

LOVE SONG ~ 君に逢いたい ~

2011年10月21日07時05分発行